

# ‘ό κόσμος, ἀλλοίωσις· ό βίος, ὑπόληψις.’

100号 1995.7.10

文・編集・発行

恋 怪子

LIVE: MURPHY'S LAW 1995.6.2, 6.3 新宿アンティノック



photo by NOB

「いいかもしれないよ」と教えてもらったバンドのライブには、とにかく行ってみる。どんなバンドなのか何にも知らないともいい。聴いてみた結果つまらなくてもいい。なにしろ行ってみないことには始まらない。MURPHY'S LAWもそんなふうにして行ってみた。

「シック・オブ・イット・オールらと同時期にNYで結成、10年以上も活動を続けるハードコア・バンドが初来日。フィッシュボーンなどとも共演したメチャメチャ楽しい彼らのライブに期待」

という小さな紹介記事をひあ（1995.6.6号）で読んだくらいで、メンバーの名前も顔も全然わからないままアンティノックへ行った。CDも聴いたことがないから、何の先入観のもちようもなく、MURPHY'S LAWの前にやっている日本のバンドのつまらない演奏をやりすごしながら、期待もしないで待っていた。MURPHY'S LAWの番になったら、機材や楽器をセッティングしているのは、スタッフは一人だけ（これが大男なんだ）、あとはどうやらメンバーのようなのだ。ドラムの人も、ベースの人も、ギターの人も、3人とも様子が自然で、あっさりしていて、とくにギターの人がそうで、目の前でカメラに向かって笑いかけ、また淡々とセッティングをやっている。そういう当り前の様子がとても感じがよくて、「もしかしたら…」と期待がわきおこってきた。

はじめに音がでたときに、その期待がみごとに的中したことがわかって思わず「ワオ！」と叫んでしまった。そして、そのままガンガン最後まで。やっぱり行ってみないことには始まらないのだ。MURPHY'S LAWはものすごくパワーに満ちていて、ヴォーカルはよく聽こえるし、演奏も変化に富んでいる。ヴォーカルの人の優しい深い両眼とすてきな笑顔が実に印象的で、LIP CREAMのジャジャを思い出したよ。

1時間20分くらいやったあいだに何回もザワザワが全身をめぐった。  
1曲終わるたびに拍手をした。こぶしをふりあげた。叫んだ。声をあげて笑った。ものすごく楽しかった。

ヴォーカルの人はステージにダイブしてきた男の子をかかえあげたり、いっしょに歌ったりしている。ベースの人はステージの前までてんてんてんベースを弾きながら、「みんな楽しそうだね」とでもいっているように観客のほうを見る笑顔が優しい。そんなふうなのに、歌も演奏も一瞬も緊張がくすぐれない。ギターの人はあまり動かず、表情も変わらず。ギュインギュインギターを鳴り響かせ、コーラスになるとワイルドに叫ぶ！アンコールになったらジャックと呼ばれている大男のスタッフがギターを弾いているので、え、あのギターの人は？って思ったら、客席のほうで、他の踊っていた観客がよけるほど激しく踊りまわっているじゃないか！ジャックが“Save me!”（「助けて！」）と悲鳴をあげて、といつも笑顔でなんだけれど、2曲目にはステージにもどって、何事もなかったかのようにまたギュインギュインとギターを弾きはじめる。なんかメンバーのなかでいちばんクレイジーな感じがしてよかったな。演奏中は私のところからは見えなくなつたけれども、ドラムがすごいのは音だけわかる。ためらいが全くなくバシバシとやっていて、それでいてクール。MURPHY'S LAWをグングン前に押し出す。曲によってはドラムにいちばんひきつけられた。スタッフの大男ジャックはコーラスに入ったり、アンコールの1曲目ではギターまで弾いていたが、どちらも実に味がある。眼鏡ごしの両眼がいつも優しく楽しそうに笑っていて、それを見ているとこっちもつられて笑ってしまう。

とっても楽しかったので、次の日（6月4日）のライブにも行くことにした。前日にくらべると観客の数がずっと多くて、全体的に「ノリ」が強かったし、ギターの人も派手に動き回っていたけれど、歌も演奏もやはりすごかった。曲順も前日とちがうところや、観客に「何が聞きたい？」とリクエストにすぐ応じたりするところに、MURPHY'S LAWのライブバンドとしての実力がじゅうぶんに發揮されていると思った。ヴォーカルの人がライブのあいだに何回も“Unity”という言葉をいっていたのが強く心に残った。

ライブのあと出口に向かう途中ギターの人に遭遇したので、サッと手を出して握手をしてもらった。

## WORDS: JIMMY GESTAPO

… 数々のN.Yのハードコアバンドが音楽性を変えたり、消えてしまつたけど、それについては？

J: それについては、レコードレベルに責任があると思う。というのは、レコードレベルがバンドをだましたりする。例えば、ドイツのLOST&FOUNDのようなレーベルは、ブートレッグなんかを出してお金を儲け、バンドにギャラを支払わなかつたり、と。ヤツらは人をよくRIP OFFするんだ。日本のパンク雑誌にも、マーフィーズ・ロウの見たこともないTシャツの広告が載っていたんだ……。ブートレッグだよ。バンドのメンバーは機材も買わなきゃいけないし、弦とかも買わなきゃいけない。食事もしないといけない。いろいろな事でお金が必要なのに、こういう人達というのは自分だけ甘い汁を吸って、人を利用だけ利用して済んでいく。

… シーンと一緒に来ていたSICK OF IT ALL等がメジャーに行つたけど？

J: それは彼らの自由であって、彼らはそういう選択をしただけだ。S.O.I.Aがメジャーに行つたという事はキャリアを前進したという事だが、俺にとつてのキャリアの前進は大きなカンパニーのバックアップ無しに、日本にこうやって来ているという事が、俺にとってのキャリアアップメントだ。もしお金をたくさん出してくれて、クリエイティブな部分も兼ねてくれるようなカンパニーがいたら、もちろん受けとめたい。それを断るような馬鹿なことはない。あと大事なのは、バンドがコントロールできていないと……。というのは、メジャーレーベルと契約を結んだ多くのバンドが、自分達でコントロールができなくなつて破滅をむかえてるんだ。いつも自分が自分でバンドをコントロールする事が大切だ。

— EAT magazine No.4 より

ヴォーカルのJIMMYによる今回の来日メンバーの紹介：

「ギターは今まで何回もMURPHY'S LAWを脱けたり、入ったりしているTODD、ベースは君のベースのCHUCKが去年のツアーのときにLAで刺殺されたあと加入したPHILで奴はもう10年以上つきあいになる。SLIPKNOT、BLITZPREEというバンドを経て今は俺達とやっている。ERICは特にバンド経験はなく、あまりハード・コアについて知らないから速に君が柔軟でいいんじゃないかなと思って加入してもらった。奴はウチに入る前は、救急車のドライバーをやってたんだ（笑）」

(DOLL 1995.8月号)

右の写真はCD “GOOD FOR NOW” の中のもの。バンダナをしているのがJIMMY、その右隣が戴されたというベーシストのCHUCK（だと思う）、ベースしているのがロードマネージャーのジャックでのCDではギターを弾いている。どうりで6月2日のアンコールでギターをあんなに弾けたわけだ。



## CD: MURPHY'S LAW "MURPHY'S LAW"



ライブのあとすぐにMURPHY'S LAWのCDを購入したが、Disc Unionに3年前に出来たばかりのCDシングル “GOOD FOR NOW” が1枚あつただけで、これは全く君が音が秀逸でパワーを感じられず、あまりおもしろくない。

つい先日アンティノックのスタッフのオニサンがおられたアルバム “MURPHY'S LAW” (1989)と2ndアルバム “GOING WITH A BANG!” (1990)を1枚にまとめたのがCISCOだと思って教えてくれたのですがすぐに買つていった。これはすごいいいアルバムで、今回のライブで演奏した歌がいくつも入っているし、ライブと聞くらいへヴィギギアフルだし文化に富んでる。ライブにはなかなか歌が入っている曲もあるって、それがとても新鮮で楽しい。

“GOOD FOR NOW” の前にフィッシュボーンのNORMWOODがプロデュースした “The Best Of S.O.I.A.” という3rdアルバムが出てるらしいが、どのレコード屋にもない。

“GOOD FOR NOW” 以後アルバムリリースがないといつても、JIMMYがFEATのインタビューで「ハード・コアって

いうのは、ライブをずっとやっていて、ツアーややっていくのが本当に姿であると思っている」といっているとおり、今回のようなライブをやりつづけて日本にまた来てくれるのならうれしいことはない。

6月2日、3日 MURPHY'S LAWのライブで「やっぱり空っぽじゃないものってあるんだ」ということをずっと感じていられたことがいちばんうれしいことだった。